



連作短編
～カフェの風景～

比良岡美紀

2009年

皆様へ

この作品は2009年に小説講座で書いたものです。ポール・オースターが編纂した『ナショナル・ストーリー・プロジェクト』を目指して書きました。カフェを舞台とした、ちょっと不思議なお話です。でもこういう「不思議」さは人生に溢れているのかもしれない、そう思っています。

パブで東日本大震災のチャリティ販売が行なわれていた間、チャリティ作品として販売しましたが、チャリティ販売終了にともない二ヶ月ほど非公開としておりました。このたび無料にて再公開しましたので、楽しんでいただければ幸いです。

(2012年4月3日)

比良岡美紀

#内容の変更等、編集を行ないました。(2012年4月23日)

カフェの視線 (1)

家庭でも職場でもない「第三の居場所」を提唱したのは、アメリカのコーヒーチェーンだったろうか。職場へ向かうときは気合を入れ、家庭へ戻る時は緊張をほぐす、そういう趣旨なのかもしれない。

私もカフェにいるときは第三の自分になり、家庭でも職場でもしないことをする。風景を眺め、ひとりの傍観者となるのだ。

具体的には、座った場所からしばらく外を眺めたあと、自分の後方に視点を移す。同じ場所に座ったまま、同じ風景を数メートル後ろから眺めてみるのだ。

後方から見る自分は、スーラの点描画に描かれた人物のように、違和感なく風景に溶け込んでいるかもしれない。その風景の中には、もちろん他の人物もいる。場合によっては、人間以外の生き物も……。

あるとき私は、リードをつけた犬を抱いて歩いている女性を目撃した。犬種はミニチュアダックスのようなようだ。私は心の中でつぶやいた。「これでは犬の散歩ではなく人間の散歩だ」そして想像が膨らんでいく。あの犬はセバスチャンだかフリードリッヒだか、およそ犬には似つかわしくない名前をつけられて、いつもこの通りを「散歩」させられているのではないだろうか。

女性は飼い主なのだろうか？ いや、ペットシッターかもしれない。だとしたら、飼い主に頼まれて、犬を抱いたまま「散歩」させているのだろう。そういえば犬は服を着ていなかった。案外、飼い主は常識的な人なのかもしれない、等々……。

カフェの客が自分たちのことをそんな風に見ているなんて、犬も女性も考えもしないだろうが、その様子は強く私の印象に残った。彼らが行ってしまっても姿が見えなくなったあと、私は視点を数メートル後方へ移し、もう一度頭の中で、彼らのいた風景を再構成してみる。

後ろから見ると、ちょうど私の前を通り過ぎたあたりで犬と女性の全身が見える。私を含めた風景は、この状態でうまくバランスがとれているようだ。私はカメラのシャッターを切るようにしてこの景色を切り取り、記憶の中に保存した。満足のいく出来である。

一息ついて、目の前のカプチーノを口元へ運ぶ。シナモンの香りがなんとも心地よい。私は一気に飲み干すと、カフェを出て家路についた。その途中、先ほどの犬と女性が信号待ちをしていた。

相変わらず抱かれたままの犬は、近づく私の方へ視線を向け、興味深そうに眺めている。彼らの後ろを通り過ぎるとき、犬と目を合わせたまま、心の中で呼びかけた。

「バイバイ、フリードリッヒ」

カフェの視線 (2)

家庭でも仕事場でもない「第三の居場所」を提唱したのは、アメリカのコーヒーチェーンだろうか。職場へ向かうときは気合を入れ、家庭へ戻る時は緊張をほぐす、そういう趣旨なのかもしれない。

私もカフェにいるときは第三の自分になり、家庭でも職場でもしないことをする。風景を眺め、ひとりの傍観者となる。

とはいえ、街なかのカフェである。ここで見る風景から人間を除外することはできない。カフェにおける風景鑑賞は、人間を眺めることと同義なのだ。

あるとき私は、カップルの喧嘩を目撃した。原因は分からないが、よくある痴話げんかの類だろう。いつものようにカフェで本を読んでいると、ハイヒールのコツコツという、規則的な音が響いてきた。その音から苛立ちが感じられたので、つい気になって顔を上げると、眼前にひらけたオープンテラス越しに、若い女性の姿が見えた。

女性は伏し目がちに早足で歩いている。そのうしろから男性の声が響く。「待てよ！」

女性は立ち止まる。しかしその肩は緊張でこわばり、頑なになった心を表しているようだ。男性が追いついた。走ってきたのか、息がはずんでいる。何やら女性に話しかけているが、私の座っているところからは聞こえない。

するといきなり、女性は肩に提げていたバッグで男性の胸のあたりを強く叩き、男性がひるんだ隙に足早に去って行った。現れる前と同様、ハイヒールの音だけが規則正しく聞こえている。

事の成り行きに私は呆気にとられたが、そのときにカフェで起こったことが、さらに私を驚かせた。客の中から喝さいが起こったのだ。私と同じように、カップルの去就に注目している人が少なからずいたということだ。

男性は、観客の存在にはじめて気づいたようにカフェへ視線をやり、バッグで叩かれた胸をさすりながら、ばつが悪そうな顔で立ち去っていった。

数年後のいま思い返してみても、記憶はきわめて鮮明である。まるで寸劇を見ているようだった。道行く人それぞれにドラマがあり、その一瞬を私たち観客に見せてくれるのだ。このとき私は、カフェにいたほかの客と同様、ギャラリーという風景の一部であった。しかしその風景は、ドラマが繰り広げられているもうひとつの風景とは交わらない。ふたつの風景の間には、埋めがたい溝のようなものが存在する。

あるときは、自分がドラマを繰り広げる側になるかもしれない。その場合、ドラマの風景には溶け込めるが、ギャラリーという風景には入れない。

このふたつの風景を繰り返し行き来しながら、人間は人生というドラマを演じていくのではないか。そんなことを思った、カフェの一日であった。

カフェは驚きと不思議にみちている！

カフェで読む本は、なるべく重厚な作品と決めていた。たとえば『カラマーゾフの兄弟』、『ア
ンナ・カレーニナ』や、チェーホフの『サハリン島』そしてフレイザーの『金枝編』。アメリカ
文学ならスタインベック、日本だったら三島か芥川がちょうどいい。毎日、犬の散歩の途中で
カフェに立ち寄り、二時間ほど「荘重な」読書を楽しむのが私の日課だった。

でもあるとき本を忘れてしまった私は、来る途中に買ったレイモンド・カーヴァーの『ささやか
だけれど、役にたつこと』を読んでいた。カーヴァーを読むのは初めてで、正直、あまり期待し
ていなかったけれど、読み始めたとたん夢中になった。人間に対する温かい視線が随所に感じら
れる。

カーヴァーをカフェでの読書リストに加えるのも悪くない、そう考えながら読み進める私のかた
わらで、突然、ミニチュアダックスのフリードリッヒが小さく吠えた。外では吠えないよう躡
けているのに、と思った瞬間、一人の女性が話しかけてきた。

「あの、すみません、ここ、掛けてもよろしいですか？」他にいくらでも席があるのに変だな、
と思いながら、私は笑顔で答えた。「ええ、どうぞ」女性はホッとした表情で腰をおろし、ウエ
イターにカプチーノを注文した。注文を終えた女性は私とフリードリッヒを繰り返し見比べ、何
か言いたげな様子だ。

文字を目で追いながら、どこかで会った人かしら？ と次第に気になってくる。ふとかたわら
を見ると、フリードリッヒがしっぽを振っていて驚いた。前の飼い主と私にしか、しっぽを振った
ことがないのに！

「あの、あなたのワンちゃん、ですよ？」女性が話しかけてくる。動転した私は、ぶっきらぼ
うな言い方をしてしまった。「そうですけど、それが何か？」

しまったと思ったけれど、どうせ二度と会わないのだ。さっさと読み終えて席を立とう、そう決
心して読書に戻った。でも女性はしつこく話しかけてくる。「ワンちゃんの名前をお聞きしても
よろしいかしら？」ああもう、いったい何なのよ！？

私は頭にきて、強い口調で言った。「この犬はフリードリッヒです。以前はペットシッターとし
て面倒を見ていましたけど、最近正式に譲り受けて飼い主になりました。それがあなたに何の関
係があるんですか？」

女性は目をまるくして私の顔を見た。さすがにやりすぎたかしらと思ったが、女性は興奮した様
子で、「信じられない、そんなことが……私が思っていたのと同じだったなんて！」と言った。
こんどは私が質問する番だった。

「あの、どういうことですか？ あなたが思っていた通り、って……？」

カフェは驚きと不思議にみちている！ つづき

話を聞いて驚いた。以前私とフリードリッヒをカフェの中から見かけて、私がペットシッターで、犬の名前がフリードリッヒに違いないと考えた、というのだ。にわかには信じがたい話だ。

でもその日、散歩から帰ろうと信号待ちをしていた時、フリードリッヒはずっと彼女を見ていたらしい。それが本当なら、彼女に小さく吠えたり、しっぽを振ったりしたことも十分説明がつく。フリードリッヒはきっと親しみを感じていたのだろう。

思いがけない出来事に私は読書どころではなくなり、女性といろいろな話をした。フリードリッヒも、女性と一緒に時間を過ごせて喜んでいるようだった。

この日を境に私はカフェを出会いの場と定めた。カフェで読書するときも、読みやすい（そして中断しても続きが気にならない）エッセイを選ぶようになった。一人の女性との出会いが、私の習慣を変えたのだ。

その後、私はカフェで恋人を見つけ、デートもカフェでするようになった。

恋人がある日話してくれたことは、同じようにちょっと信じられないものだった。カップルの喧嘩を目撃して、女性が男性を振り払って去っていった瞬間、カフェの客から喝さいが起こった、というのだ。私は首を横に振り、笑いながら言った。

「信じられない、そんなことあるはずないわ。あなたの創作じゃないの？」恋人は必死で私を説得にかかった。「創作なんかじゃない、本当に起きたことなんだ。事実は小説より奇なり、というだろう？」内心、どうだか、と思ったが、なるほどね、と一応は納得してみせた。そしてふと思いついて、この前自分の身に起こった、あの出来事について話してみることにした。

「それで思い出したけど、私も最近、不思議な経験をしたのよ」

話を進めるにつれ、恋人は信じられないという表情になり、私が話し終わると興奮して言った。「ありえない！ 見ただけで犬の名前が分かるなんて、そんなことあるはずがない。それこそ君の創作だろう！？」私は首をゆっくりと横に振りながら言った。

「違うわ、本当のことよ。事実は小説より奇なり、ってあなたも言ったじゃない」

そしてフリードリッヒに同意を求めた。「ねえ、フリードリッヒ？」フリードリッヒは嬉しそうにしっぽを振って、ワン、と小さく吠えた。

<終わり>

カフェにまつわる連作ショートストーリー

<http://p.booklog.jp/book/23634>

著者 : miki-hiraoka

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/miki-hiraoka/profile>

発行所 : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/23634>

ブクログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/23634>